通識教育學報第十一期 第 49 至 67 頁 2007 年 6 月 中國醫藥大學通識教育中心

探討《洪武正韻》對日本韻書之影響

辜玉茹

中國醫藥大學通識教育中心 副教授

摘　要

《洪武正韻》是明太祖洪武八年（1375）樂韶鳳、宋濂等人奉詔編成的一部官方韻書，共 16 卷。明朝的 208 年之間，流傳了甚多的版本。朝鮮有申叔舟、成三問等人以《洪武正韻》為底本，用「訓民正音」加以註解的《洪武正韻譯訓》端宗三年（1455 年）。日本在康曆三年（1381）十一月二日的和漢聯句詩會裡，以《洪武正韻》的韻目之韻字來吟漢詩。之前，詩會中「和漢聯句」的漢句（漢詩）本無押韻，押韻的規則之訂定始於當時（康曆三年）。更於元祿十四年（1701）水戶藩以《洪武正韻》為底本，用《聚分韻略》（三重韻）的排列方式，編撰了《洪武聚分韻》（一稱《洪武三重韻》）。也就是說《洪武聚分韻》的韻目韻字等，皆來自於《洪武正韻》。日本古書籍的目錄裡，亦可看到《洪武三重韻》的名稱。本論文就《洪武正韻》在日本的使用情形，以及相關衍生的刊本等的探究，證明《洪武正韻》在日本的韻書史上佔有相當比重的地位。

關鍵詞：和漢聯句、洪武正韻、洪武聚分韻、韻書

『洪武正韻』の利用と『洪武聚分韻』の出版

一、 『洪武正韻』の版本・伝本

『洪武正韻』は、明初、樂韶鳳、宋濂らにより編纂され、洪武八年（1375）行された勅撰の官定韻書である。従来、中国の音韻史等[1]の分野からの研究が主として行われてきたが、「漢籍目録」[2]によると、いくつもの版本が日本に将来され、中世期に行われていた和漢・漢和聯句の連衆にも利用されていたことがわかる。

従来の韻書は、隋の陸法言の 206 韻（『切韻』)、南宋の劉淵の 107 韻(『壬子新刊礼部韻略』)、元の陰時夫兄弟の 106 韻（『韻府群玉』、『古今韻会挙要』、『古今韻会挙用小補』）[3]などの韻目数が一般的であるが、『洪武正韻』は次のような 76 韻[4]の韻目を持っていることに特徴がある。

平　声　東・支・齊・魚・模・皆・灰・真・寒・刪・先・蕭・爻・歌・麻・遮・陽・庚・尤・侵・覃・鹽（22 韻）
上　声　董・紙・薺・語・姥・解・賄・軫・旱・産・銑・篠・巧・哿・馬・者・養・梗・有・寢・感・琰（22 韻）
去　声　送・寘・霽・御・暮・泰・隊・震・翰・諫・霰・嘯・效・箇・禡・蔗・漾・敬・宥・沁・勘・豔（22 韻）
入　声　屋・質・曷・轄・屑・藥・陌・緝・合・葉（10 韻）

『洪武正韻』の版本・伝本については次のようなものが見られる。

---

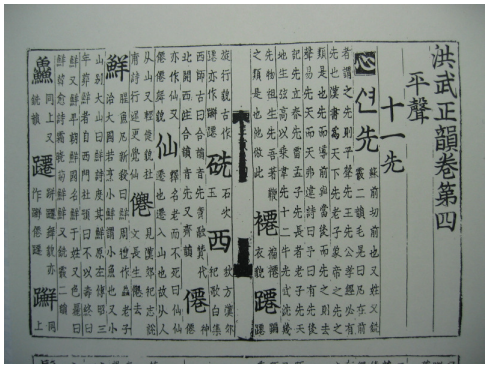
[1] 玄幸子「『洪武正韻』の編纂の姿勢に見る明代正韻」(『中国文人の思考と表現』汲古書院 2000 年)、甯忌浮『洪武正韻研究』（上海辞書出版社 2003 年）等。

[2] 『内閣文庫漢籍図書目録』、『東京大学漢籍図書目録』、『京都大学漢籍図書目録』、『彰考館図書目録』等。

[3] 元の陰時夫兄弟が『韻府群玉』を作り、一韻（拯韻）を減じて 106 韻とした。これが現行の詩韻で、上平声 15 韻・下平声 15 韻・上声 29 韻・去声 30 韻・入声 17 韻。

[4] 甯忌浮氏の『洪武正韻研究』（上海辞書出版社 2003 年）に「80 韻本」のものもあるが、拙論では「76 韻本」を対象とする。

ア、中国


洪武正韻卷第四
平聲
十一先

〔図一〕『洪武正韻譯訓』高麗大學校影印叢書影印本

甯忌浮の『洪武正韻研究』[5]によると、洪武八年に刊行された原刊本の他に、明の二百八年間に正徳（正徳六年〔1511〕、正徳十年〔1515〕）、嘉靖（嘉靖二十七年〔1548〕、嘉靖三十八年〔1559〕、嘉靖四十年〔1561〕）、隆慶（隆慶元年〔1567〕）、萬曆（萬曆三年〔1575年〕、萬曆十一年〔1583〕）及び崇禎年間（崇禎四年〔1631〕、崇禎十三年〔1640〕）等の版本が現存している。以下刊行順に掲出する。

1. 洪武八年（1375）原刊本
2. 正徳六年（1511）欽差鎮守福建印綬太監商飈重刊本（北京図書館）
3. 正徳十年（1515）巡按河南監察御史張淮翻刊本（北京図書館）
4. 嘉靖二十七年（1548）衡藩刻藍印本（北京図書館）
5. 嘉靖三十八年（1559）蜀府刻本
6. 嘉靖四十年（1561）巡按直隷監察御史劉以節刊本（東京大学）
7. 肅府本（北京図書館）
8. 隆慶元年（1567）衡藩刻本（内閣文庫）
9. 萬曆三年（1575）司禮監刻本（内閣文庫、京都大学）
10. 萬曆十一年（1583）衡藩刻本
11. 崇禎四年（1631）刊本
12. 崇禎十三年（1640）重刊本
13. その他に『洪武正韻』の増補本、注疏本としては以下のようなものがある。
    ① 張士佩が『洪武正韻』の一万四千字あまり、検索のために、部首

[5] 同「注 4」11 頁参照。

によって配列して、『洪武正韻』の付録に『洪武正韻玉鍵』一巻（萬暦二年〔1574〕）している。

② 周家棟が『洪武正韻玉鍵』を増補して、『正韻彙編』四巻（萬暦三十年〔1602〕）にした。

③ 楊時偉『洪武正韻箋』十六巻（崇禎四年〔1631〕）刊行。

④ 李畿『洪武正韻玉鍵釋義』二巻。

⑤ 龔時憲『洪武正韻注疏』十六巻。

⑥ 任世鏜『正韻統宗』四巻

⑦ 童漢臣『正韻便覧』二巻。

⑧ 外に、朱睦『正韻偏旁』、『正韻類鈔』、『洪武正韻旁音釋義』等[6]がある。

イ、朝鮮

李氏朝鮮世宗の命により申叔舟・成三問などが『洪武正韻』を底本して、訓民正音（ハングル）で注した『洪武正韻譯訓』〔図一〕（1455）[7]が刊行された。また、朝鮮李朝英祖四十六年（1770・清乾隆三十五年）に、中国の萬暦三年（1575）司禮監刻本を底本し、「朝鮮英祖本」が刊行された。

ウ、日本

まず、「漢籍書籍目録」によると、

○『洪武正韻』（東洋文庫）

○『洪武正韻』十六巻 明楽韶鳳等奉敕撰 嘉靖四十年巡安直隷監察御史劉以節刊本（『東京大学総合図書館漢籍目録』1995 年）

○『洪武正韻』十六巻 明宋濂等奉敕撰 萬暦三年司禮監重刊本（『京都大学人文科学研究所漢籍目録』1979 年）

---

6 『千頃堂書目』〔(清)虞稷撰 上海古籍出版社 2001 年〕、『小學考』〔(清) 謝啓昆撰 藝文印書館印行 1974 年〕参照。

7 『高麗大學校影印叢書』第二輯 高麗大學校出版部 1974 年（影印本）。

C.E.P.S.

○『洪武正韻』明楽韶鳳等撰 洪武八年刊『(彰考館図書目録) 焼失)

○『洪武正韻』十六巻 明楽韶鳳等撰 刊本三年 明万暦司礼監 五冊（内閣文庫 経 278-0217）[8]

○『洪武正韻』十六巻 明楽韶鳳等撰 刊本（跋刊）一年 明隆慶五冊（内閣文庫 経 278-0225）

○『洪武正韻牋』明宋濂 明崇禎版六冊（尊経閣文庫）

○『洪武正韻』十六巻附玉鍵釈義二巻 明楽韶鳳等撰 李畿八冊（内閣文庫 経 044-0019）

○『洪武正韻』四巻 明宋濂等奉敕撰 明楊時偉補牋 崇禎四年刊本（『京都大学人文科学研究所漢籍目録』1963 年による。）

等が見られる。洪武八年（1375）、嘉靖四十年（1561）、隆慶元年（1567）、萬暦三年（1575）等の版本、また、『洪武正韻』の増補本、注疏本が日本に伝わってきたことがわかる。

日本での五山版については、川瀬一馬氏が『増訂古辞書の研究』[9]に、

> 禅僧の普及発達に伴って宋元以来の唐音の知識を求めたり、韻書を繙いたりする者次第に増加して来たが、それ等の人々は主として新舶載の漢字字書類（韻書には禮部韻略・**洪武正韻**等、なほ少しく溯っては宋の廣韻〔廣韻の宋版諸本の現存するものも少くない。〕）を使用し、南北朝に至って、それ等の漢字字書は、禅宗諸寺院の開版事業が隆盛になるに従って、所謂五山版として覆刻が相續いて行はれ、その方面の要求を充足するに至った。

と述べられていることから、『洪武正韻』の和刻本（五山版）が刊行された可能性が高いと思われる。

また、『經籍答問』[10]に、『洪武正韻』の和刻本について次のよう

---

[8] 一冊目 1～3 巻、二冊目 4～6 巻、三冊目 7～9 巻、四冊目 10 巻～12 巻、五冊目 13 巻～16 巻。

[9] 川瀬一馬『増訂古辞書の研究』雄松堂（1986 年）356 頁参照。

[10] 『経籍答問』（文政三年〔1820 年〕～同八年〔1825 年〕の間成立）は松沢老泉の著作（『和漢名著解題選』二 ゆまに書房〔1996 年〕）510 頁参照。

に記録されている。

水戸様

（上略）書林小川多左衛門へ被レ下候版木の分。

草露貫珠　参考太平記（中略）**洪武正韻**　醫家必讀（下略）

因にしるす。水府家御著述の書目左の如し。

京都の書肆「小川多左衛門」に『洪武正韻』の版木が存在していたのだろうか。ただし、『經籍答問』に載っている『洪武正韻』は後述の『洪武聚分韻』を示す可能性も考えられる。

また、下表〔表一〕でわかるように、

〔表一〕　各書籍目録

1	延宝三年刊書籍目録（1675 年）	十、	洪武正韻彙編 楚黄隆之周家棟輯
2	元禄五年刊書籍目録（1692 年）	十、	洪武正韻彙編 楚黄隆之周家棟輯
3	元禄十二年刊新増補書籍目録（1699）	十、	洪武正韻彙編 楚黄隆之周家棟輯
4	延宝三年新増刊書籍目録（1675 年）	山ガタヤ	洪武正韻 高皇帝御製
5	天和元年刊書籍目録大全（1681 年）	山ガタヤ	洪武正韻 高皇帝御製
6	元禄九年書籍目録大全（1696 年）	山ガタヤ	洪武正韻 高皇帝御製 廿匁
7	宝永六年書籍目録大全（1709 年）	山ガタヤ	洪武正韻 高皇帝御製 廿匁
8	正徳五年書籍目録大全（1715 年）	山ガタヤ	洪武正韻 高皇帝御製
9	和刻本漢籍分類目録[11]	(増補)洪武正韻彙編一〇巻 明周家 棟呉光義 朱光祖校 寛文九年刊(山形屋)返縦 大一〇	
10	尊経閣文庫漢籍分類目録	増補洪武正韻彙編 十巻　明周家棟 寛文版 10	

延宝三年刊『書籍目録』等の書籍目録に「洪武正韻彙編 楚黄隆之周家棟輯[12]」とあり、延宝三年新増刊『書籍目録』等の書籍目録では「十山ガタヤ洪武正韻高皇帝御製　廿匁」となっている。延宝三年刊『書籍目録』等の書籍目録と延宝三年新増刊『書籍目録』等の書籍目録の書名では、『洪

[11] 『和刻本漢籍分類目録』長澤規矩也著 汲古書院 1976 年。

[12] 周家棟字は隆之、楚黄の人（『長澤規矩也著作集 第十巻』汲古書院 1987 年）213 頁参照。

武正韻彙編』、『洪武正韻』になっていて、書名に違いがあるが、書肆名は「山ガタヤ」、「山形屋」(『和刻本漢籍分類目録』) とあり、同一の書『増補洪武正韻彙編』(尊経閣文庫蔵本) と推定できる。

『洪武正韻彙編』(萬暦三十年〔1602〕) は明周家棟が『洪武正韻玉鍵』(萬暦二年〔1574〕)[13]に基づいて、従来の韻書『洪武正韻』を部首によって十七類の配列にして、『洪武正韻彙編』(四巻) と改編したものである。尊経閣文庫所蔵の『増補洪武正韻彙編』の奥付に「寛文九年 巳酉中春山形屋刊」と示しているために、日本の近世期に『洪武正韻』(『洪武正韻彙編』) は一般的な辞書として使用されていたことがわかる。

また、江戸期 (元禄八年〔1695〕) に明・凌稚隆編『五車韻瑞』の和刻本[14]が刊行されていた。『五車韻瑞』の付録に『洪武正韻』一冊に韻字の分類のみ紹介されている。他に、『洪武正韻』に関する書物は『洪武正韻彙編』と同時期に『正韻字體辨疑』[15]の和刻本も刊行されていた。

これらのことから、『洪武正韻』に関わる書物は江戸初期にかなり重視されていたことがわかる。

二、『洪武正韻』の伝来と利用

『洪武正韻』は洪武八年 (1375) に刊行されてまもなく、日本に到来したことは、義堂周信の日記『空華日用工夫略集』[16]の記事に、

康暦三年 (1381) 十一月二日 (中国は洪武十四年)

[13] 張士佩『洪武正韻玉鍵』一巻 (萬暦二年)。『洪武正韻』の一万四千字あまり、 検索のために、部首によって配列して、『洪武正韻』の付録に付している。

[14] 筑波大学蔵本 (百六十巻付録一巻 50 冊) 参照。

[15] 筑波大学蔵本参照。

[16] 辻善之助『空華日用工夫略集』太洋社 (1939 年) 205 頁参照。

> 准后(良基)、将軍兩人入内盤馬之戯、和漢聯句。始用今大明撰**洪武正韻**群玉為韻、遇第一東字。凡吾國俗舊例、和漢聯句、漢有韻、和無韻。今則新立此、和亦押韻。准后以起句、讓余、太清(宗渭)両人。々々相推、迫不得已則題發句曰、半欄分愛日。准后次曰、コノハモニハノツモル紅。太清曰、水紋池濯錦云々

と書いてあることによって知られる。和漢聯句会では、この頃から、明の『洪武正韻』を用いたことがこの記事によって明らかである。更に、『洪武正韻』が到来したことを以って、従来の第一句が和句で、第二句が漢句の場合（和漢聯句）は漢句（偶数句）が韻を踏んでいるが、第一句が漢句で、第二句が和句の場合（漢和聯句）は和句（偶数句）が韻を踏んでいないために、ここで、新しい式目を立てて「和も亦押韻す」と定めた。そして、二条良基が「起句」（第唱句）を義堂周信、太清宗渭の両人に譲ったが、「両人相ひ推し、迫られ已むを得ず」、義堂周信が「半欄分愛日」（庇から半分さし入る冬の陽をいとおしむ）と詠み、次に二条良基が「コノハモニハノツモル紅」と詠み、また、太清宗渭が「水紋池濯錦云々」（池の水紋が錦のような紅葉を洗う）と詠み、漢和聯句を詠んでいた。ここでの入韻句「コノハモニハノツモル紅」の「紅」は東韻に属している（『洪武正韻』巻一‐5）。

和漢・漢和聯句会の連衆には、早い時期から『洪武正韻』のことを知り、更に使用されていたことがこの記事から判明する。

また、永徳元年（1381）十一月十三日の義堂周信の作品[17]に、

> 試**洪武韻**、上二条藤相国。以紀倭漢聯句新格美云
> 相国頒新令　　相国　新令を頒ち
> 聯詞及竺賓　　詞を聯ねて竺賓に及ぶ

[17] 蔭木英雄『訓注空華日用工夫略集』思文閣（1982年）403頁参照。

試開群玉府　試みに群玉府を開き
仍集五湖雲　仍て五湖の雲を集む
松雪北臺暁　松雪北台の暁
梅花東閣春　梅花東閣の春
愧非潛子輩　愧ずらくは潛子が輩に非ざるに
忝謁醉翁門　忝くも醉翁の門に謁す

とあって、義堂周信が明の韻書『洪武正韻』に基いて試みに和漢聯句新格の美を紀して「二条良基」に上る作品である。「新格」というのは、『洪武正韻』に依ったことをいうのである。ここで、「賓」・「雲」・「春」・「門」の韻字は『洪武正韻』の平声の「八、真韻」（巻三）に属している。〔表二〕で示しているように、『洪武正韻』の韻目と『廣韻』、『聚分韻略』、『古今韻会挙要』、『韻会小補』等の韻書の韻目とは相違する。さらに〔表三〕でわかるように、「賓」・「雲」・「春」・「門」はそれぞれ「真韻」・「文韻」・「元韻」などの韻目に属している。ここで、『洪武正韻』を利用したことがはっきりしているのである。

前述した『空華日用工夫略集』（康暦三年〔1381〕）に、『洪武正韻』が和漢・漢和聯句の連衆に将来されたと記されていたが、数十年後、瑞渓周鳳（1391～1473）の『臥雲日件録抜尤』[18]には『洪武正韻』について次のようなことが記録されている。

[18] 文安三年〔1446〕～文明五年〔1473〕（『大日本古記録』十三 岩波書店 1978 年）27 頁参照。

〔表二〕『洪武正韻』と各韻書の韻目(平声)との比較表

(上平)

廣韻	聚分韻略	韻会	小補	韻府	洪武
1 東	1 東	1 東	1 東	1 東	1 東
2 冬	2 冬鍾	2 冬	2 冬	2 冬	
3 鍾					
4 江	3 江	3 江	3 江	3 江	
5 支	4 支脂之	4 支	4 支	4 支	2 支
6 脂					
7 之					
8 微	5 微	5 微	5 微	5 微	
9 魚	6 魚	6 魚	6 魚	6 魚	4 魚
10 虞	7 虞	7 虞	7 虞	7 虞	
11 模					5 模
12 齊	8 齊	8 齊	8 齊	8 齊	3 齊
13 佳	9 佳皆	9 佳	9 佳	9 佳	6 皆
14 皆					
15 灰	10 灰咍	10 灰	10 灰	10 灰	7 灰
16 咍					
17 真	1 真諄臻	11 真	11 真	11 真	8 真
18 諄					
19 臻					
20 文	12 文殷	12 文	12 文	12 文	
21 殷					
22 元	13 元魂痕	13 元	13 元	13 元	
23 魂					
24 痕					
25 寒	14 寒桓	14 寒	14 寒	14 寒	9 寒
26 桓					
27 刪	15 刪山	15 刪	15 刪	15 刪	10 刪
28 山					

(下平)

廣韻	聚分韻略	韻会	小補	韻府	洪武
1 先	1 先仙	1 先	1 先	1 先	11 先
2 仙					
3 蕭	2 蕭宵	2 蕭	2 蕭	2 蕭	12 蕭
4 宵					
5 肴	3 肴	3 肴	3 肴	3 肴	13 爻
6 豪	4 豪	4 豪	4 豪	4 豪	
7 歌	5 歌戈	5 歌	5 歌	5 歌	14 歌
8 戈					15 麻
9 麻	6 麻	6 麻	6 麻	6 麻	16 遮
10 陽	7 陽唐	7 陽	7 陽	7 陽	17 陽
11 唐					
12 庚	8 庚耕清	8 庚	8 庚	8 庚	18 庚
13 耕					
14 清					
15 青	9 青	9 青	9 青	9 青	
16 蒸	10 蒸登	10 蒸	10 蒸	10 蒸	
17 登					
18 尤	11 尤侯幽	11 尤	11 尤	11 尤	19 尤
19 侯					
20 幽					
21 侵	12 侵	12 侵	12 侵	12 侵	20 侵
22 覃					
23 談	13 覃談	13 覃	13 覃	13 覃	21 覃
24 鹽	14 鹽添	14 鹽	14 鹽	14 鹽	22 鹽
25 添					
26 咸	15 咸銜	15 咸	15 咸	15 咸	
27 銜					
28 嚴※	16 嚴凡				
29 凡					

※『廣韻』の下平「28 嚴」は「平水韻」になると、下平「14 鹽」に属している。

※ テキストは〔表三〕のテキストと同じ。

〔表三〕「賓」・「雲」・「春」・「門」の各韻書に所属する韻目

	「賓」	「雲」	「春」	「門」
廣　　韻	真韻 (韻上平‐47)	文韻 (韻上平‐51)	諄韻 (韻上平‐50)	魂韻 (韻上平‐55)
聚分韻略	真韻　(1149)	文韻　(1249)	真韻　(1136)	元韻　(1309)
古今韻会	真韻　(巻四‐30)	文韻　(巻五‐3)	真韻　(巻四‐27)	元韻　(巻五‐10)
韻会小補	真韻　(巻四‐66)	文韻　(巻五‐　)	真韻　(巻四‐61)	元韻　(巻五‐24)
韻府羣玉	真韻　(巻四‐10)	文韻　(巻四‐30)	真韻　(巻四‐23)	元韻　(巻四‐54)
洪武正韻	真韻　(巻三‐3)	真韻　(巻三‐5)	真韻　(巻三‐8)	真韻　(巻三‐12)

テキスト：廣韻　　→『校正宋本廣韻附索引』藝文印書館印行 1991 年
聚分韻略 →（慶長壬子版）『聚分韻略の研究』奥村三雄 風間書房 1973 年
古今韻会 →『古今韻会挙要』中華書局 2000 年
韻会小補 →『古今韻会挙要小補』全 5 巻 1994 年 近思文庫編刊
韻府羣玉 →『韻府羣玉』上海古籍出版社 1991 年
洪武正韻 →『洪武正韻』景印文淵閣四庫全書 第 239 冊

文安五年（1448）五月五日

> 大外記（清原業忠）來訪。予曰、昔時二条攝政（良基）、与義堂（周信）和尚和漢、和亦用韻。時**洪武韻府**初來、特用此也、外記曰、某見其和漢本。因曰、吾朝用漢土書、必有施行朝廷之命、如孟子、則未施行之書也、攝政公用**洪武韻府**、擬施行也
> （大外記〔清原業原〕来訪す。よ曰く、「昔時二条摂政、義堂和尚との和漢に、和も亦た韻を用う。時に洪武韻府初めて来り、特に此を用うる也」と。外記曰く、「某、其の和漢本を見たり」と。因みに曰く、「吾が朝に漢土の書を用うる時、必ず朝廷施行の命有り。孟子の如きは、則ち未施行の書也。摂政公の洪武韻府を用うるは、施行に擬する也」と。）

二条良基と義堂周信は初めて将来された『洪武正韻』によって、和漢聯句(漢和聯句)の和句にも韻を踏んだという。そして、二条良基の「擬施行令」[19]に「吾が朝に漢土の書を用うる時、必ず朝廷施行

[19] 「施行」については、井上順理の『本邦中世までにおける孟子受容史の研究』(風間書房 1972 年)376 頁、太田晶二郎の「漢籍の施行」(『太田晶二郎著作集』第一冊 1991 年）275 頁等の

の命有り。孟子の如きは、則ち未施行の書也」とあることから、日本では、漢籍を始めて採用する時は、必ず朝廷から「施行」の命令があってからだということもわかる。『洪武正韻』はこの頃から正式に採用されたと言えるのである。また、外記曰く「某、其の和漢本を見たり」とあって、ここでの「和漢本」は日本で刊行されたものということになると、前述の『洪武正韻』の「五山版」の刊行も裏付けられるのである。その上、和漢・漢和聯句の連衆（公家・武家・五山僧等）に『洪武正韻』が利用されていたことが明らかになる。

三、『洪武正韻』から『洪武聚分韻』への発展

元禄十四年（1701）に水戸藩が『洪武正韻』を底本として、『聚分韻略』（『三重韻』）のような形式で再編纂し、『洪武聚分韻』を刊行した。

清の『康熙字典』（1716 年刊）の序文に、

> 自リ説-文ニ以-後字-書ノ善キ者。於テハレ梁ニ則玉-篇。於テハレ唐ニ則廣-韻。於テハレ宋ニ則集-韻。於テハレ金ニ則五-音集-韻。於テハレ元ニ則韻-會。於テハレ明ニ則**洪-武正-韻**。

と各時代の代表的な韻書が挙げられている。『洪武正韻』はまさに明代の代表的な韻書とされている。

恐らくは、日本でも、『洪武正韻』の「五山版」が刊行されたであろうし、江戸時代には和刻本『洪武正韻彙編』が刊行されていたことが確かである。にもかかわらず、『洪武正韻』の各種の重刊本、注疏本が中国から輸入されていたことも、唐本屋田中清兵衛の『唐本

論文には詳しく述べられている。

目録』[20]に、**『洪武正韻釋義』**、**『洪武正韻』**等の記録が見られるのである。

更に、水戸藩で宝永二年（1705）に『洪武正韻』を底本として、『洪武聚分韻』[21]が編纂され、刊行されたのである。これらの刊行事情については、『洪武聚分韻』の序文に、

> 公好_攻_詩賦ヲ。間據_正韻ニ。自_謂ラク正韻苟_不正ナラ則已ミヲ。正ナラハ則烏ンソ可レ廢ス也。遂_命_儒臣ニ。摘レ要即キレ約_。梳_爬就ケレ緒。務テ_令_明白簡_切ナラ。題スル_以ス_今ノ名ヲ_。蓋シ_放フト_濟北聚分韻略ノ故事ニ_云。

とあり、光圀が僧蘭山に『洪武正韻』の正統性を追究させ、正統な韻書ならば、廃してはならないことを主張し、虎関師錬の『聚分韻略』（『三重韻』）を参照して、『洪武聚分韻』の編纂を命じたのである。光圀が実際に『洪武正韻』を利用していたことが『増補水戸の文籍』[22]に、

> 行實に晩年好みて詩餘を作り。往々洪武韻を用ふ。毎に謂ふ。其の書王命に成りしに。詩賦の沈韻に従ふは何ぞやと。乃命じて僧師錬が書に効ひ。洪武聚分韻を撰べりと見ゆ。命を受けしは僧蘭山なり。

と記載している。「行實に晩年好みて詩餘を作り。往々洪武韻を用ふ」と見え、光圀が『洪武正韻』に対する熱愛が窺える。

○『洪武聚分韻』の版本

---

[20] 『史泉』三十五・三十六号合併号（関西大学学会 1967 年 12 月）。

[21] 『洪武聚分韻』の編纂過程の事情について、倉員正江が「水戸藩儒酒泉竹軒と韻書『洪武聚分韻』の編纂—書肆茨木多左衛門との関係に及ぶ—」（『近世文芸』六十六巻 1997 年 7 月）で詳しく述べられている。

[22] 清水正健『増補水戸の文籍』水戸の学風普及会（1934 年）6 頁参照。

『洪武聚分韻』は八巻、首一巻。全九冊。奥付に「宝永二乙酉年孟春穀旦　六角通林茨城多左衛門開版」と記している。現存する版本は『国書総目録』によると、次のような三種が見られる。

八巻付一巻九冊 辞書 井上玄桐点、彰考館編 成元禄十四年刊 宝永二年版—東大・東北大狩野・刈谷・高野山光台院・無窮会神習、 正徳三版—蓬左、 刊年不明本—金刀比羅（二冊）

今回は右表で示すようなものを対象として比較調査した。筑波大学所蔵本『洪武聚分韻』〔図二〕は「『洪武正韻』の序文」が欠けていることがわかる。また、筑波大学には、「宝永二年版本」と同版木の異本が見られる。外題『洪武正韻』〔図三〕、内題『洪武聚分韻』、奥付が「宝永二年」となっている。

また、「古籍書籍目録」に、

『宝永六年書籍目録大全』(1709 年)　九冊　『洪武三重韻』水戸公　十二匁

『正徳五年書籍目録大全』(1715 年)　九冊　『洪武三重韻』水戸公　十四匁

とあり、書名は『洪武三重韻』になっている。正徳三年版本の巻末付録に、「彰考館訂本刊行目録」に『洪武聚分韻』のことを「洪武三重韻 洪武正韻也 九冊」と記してある。これらのことから、当時、『洪武聚分韻』は『洪武三重韻』、『洪武正韻』とも称されていたことがわ

〔図二〕『洪武聚分韻』筑波大学蔵本

〔図三〕『洪武正韻』筑波大学蔵本

かる。

○『洪武正韻』と『洪武聚分韻』と『聚分韻略』との比較

『洪武聚分韻』と『洪武正韻』との顕著な差は、『洪武正韻』は上平・下平・上声・去声・入声の順序で計 76 の韻目で配列注釈されているのに対し、『洪武聚分韻』は『聚分韻略』の意義分類に習って、同韻字を平・上・去の三段に重ね、入聲のみ巻末に付した体裁で編纂されている点である。この他にも少々相違点があるが、以下「ア、配列」、「イ、韻字数」の順で説明する。

『洪武正韻』とこの書簡の内容を比較すれば、次のようである。

ア、配列

『洪武正韻』　韻によって、配列。(意義分類されていない)

『聚分韻略』　乾坤・時候・気形・支體・態藝・生植・食服・器財・光彩・數量・虚押・複用　十二門に分けて配列。

『洪武聚分韻』乾坤・時令・人倫・氣形・支體・態藝・生植・食服・器財・光彩・數量・虚押　十二門に分けて配列。（韻字の配列は『洪武正韻』と同配列）

この事情について、「元禄九年十九日付宗淳・井上玄桐[23]宛澹泊・顧言書簡」に[24]、次のように記載されている。

一　「聚分韻」十二門の内、「複用門」御無用ニ入、可被成由、御意之段兼而承知仕罷在候ニ付、是は除申候而、多は虚押之門ニ入、又は字義ニより、それぞ

[23] 井上挹翠 諱を玄桐と云。挹翠は其の号なり。京師の人にて。初寺井玄東と称す。天和二年（1682）義公に仕へ。儒医を以て左右に近侍す。公薨後。辞して京師に歸り。元禄十五年（1702）歿す。（清水正健『増補水戸の文籍』水戸の学風普及会 1934 年）41 頁参照。

[24] 倉員正江「水戸藩儒酒泉竹軒と韻書『洪武聚分韻』の編纂—書肆茨木多左衛門との関係に及ぶ—」(『近世文芸』六十六巻 1997 年 7 月)33 頁参照。

れ之門類へ取入申候。「聚分韻」ニは「人倫氣形」一門ニいたし有之候ヲ、此度は「人倫」「氣形」と二門にわけ申候、是も兼而、ケ様之　思召ニて御座候様ニ覺申候へ共、御存之通、此方ニは、作例之書付扣等も無御座候ニ付、何も了簡ニて仕立申候儀ニ御座候間、何共無心元奉存候、「複用門」除申候代りニ、「人倫門」入申候故、門類は都合十二門ニて御ざ候、猶又門類等、思召候も可有御座候哉、いかゝ歟伺度奉存候（下略）。

これはまさに『洪武聚分韻』の十二門の記述と一致している。

イ、韻字数

『洪武正韻』と『洪武聚分韻』の韻字数〔表四〕を比較すると、『洪武聚分韻』の方が若干減少している。減少した韻字は大抵『洪武正韻』と同韻目で重複した韻字、異体字等である。

例えば、先仙韻

『洪武正韻』下平声の先仙韻韻字数 386 字。

『洪武聚分韻』下平声の先仙韻字数 324 字。

例文１：

『洪武正韻』[25]に、

65　滇　滇池地名 又見下。
79　滇　漢郊祀歌泛泛滇滇從高斿晉灼音振旅闐闐之闐盛貌。

『洪武聚分韻』[26]に、

10　滇（テン）サカンナリ　—池ハ地ノ二名 又亭年ノ二切漢ノ郊-祀ノ二歌ニ泛-泛——從フレ高斿ニ晉-灼音振-旅闐闐ノ之闐盛ナル貌。

例文２：

『洪武正韻』に、

141　煙　因肩切 火鬱氣亦作烟从西誤。
142　烟　荀子鳧鴈若烟海 又真韻。

『洪武聚分韻』に、

20　煙（エン）ケフリ　因-肩ノ二切 火鬱氣亦作ルレ烟ニ 荀ー子鳧鴈若シレ-烟海 又真韻。

[25] 『洪武正韻』景印文淵閣四庫全書 第 239 冊。
[26] 筑波大学蔵本参照。

〔表四〕『洪武正韻』と『洪武聚分韻』との韻字数　比較表

	上　平			下　平			上　声			去　声			入　声		
		正	分		正	分		正	分		正	分		正	分
1	東	347	323	先	386	324	董	127	117	送	121	102	屋	311	276
2	支	481	423	蕭	275	229	紙	247	230	寘	403	343	質	333	260
3	齊	237	203	爻	233	206	薺	138	123	霽	188	156	曷	89	74
4	魚	276	240	歌	165	142	語	184	157	御	161	137	轄	107	92
5	模	206	182	麻	130	113	姥	152	135	暮	168	146	屑	315	122
6	皆	124	107	遮	30	25	解	74	65	泰	239	200	藥	383	318
7	灰	251	205	陽	389	346	賄	154	130	隊	334	279	陌	559	450
8	真	446	364	庚	511	439	軫	229	182	震	254	207	緝	78	67
9	寒	143	128	尤	313	271	旱	66	52	翰	125	103	合	137	115
10	刪	148	136	侵	107	98	産	89	67	諫	124	102	葉	137	115
11				覃	139	116	銑	256	219	霰	244	196			
12				鹽	124	105	篠	126	112	嘯	119	104			
13							巧	124	97	效	138	116			
14							哿	102	82	箇	70	57			
15							馬	43	36	禡	94	74			
16							者	25	23	蔗	21	19			
17							養	186	173	漾	244	214			
18							梗	151	131	敬	251	207			
19							有	166	144	宥	195	160			
20							寢	44	38	沁	50	40			
21							感	107	96	勘	70	46			
22							琰	77	71	豔	64	49			

※「正」→『洪武正韻』　「分」→『洪武聚分韻』

以上の「例１」は『洪武正韻』に同じ韻字（滇）を『洪武聚分韻』で一箇所に合わせて纏めているのである。「例２」は『洪武正韻』に「煙」と「烟」の同声異体字を『洪武聚分韻』で同じく一箇所に合わせて纏めているのである。このために、『洪武聚分韻』の韻字数は『洪武正韻』より減少しているというのである。また、異体字については、『洪武聚分韻』に各韻毎に同声異体字の対照を新たに整理して、巻頭に付していることが特徴である。

ウ、注文

『洪武正韻』と『洪武聚分韻』の注文との比較は次の例を示す。

例えば、十一、先韻

例文１：

『洪武正韻』　16 天 他前切 説文天顚也 至高無上古作　象積氣之形 毛詩傳尊而稱之則稱皇天 釋名曰豫司冀以舌腹言之天顯也 在上高顯也 青徐以古頭言之天坦也 坦然而高遠也。

『洪武聚分韻』　3 天(テン)ソラ　他-前(ノ)二切説文(ニ)一(ハ)顚(之)二也。

例文２：

『洪武正韻』　136 沿　從流而下也 循也 俗作　左傳　漢泝江杜預曰沿順流泝逆流亦作巡从音鉉。

『洪武聚分韻』 134 沿(エン)シタガフ　從(テ)レ流(ニ)而下(ル)之也 循也。

以上の「例１」と「例２」のように、『洪武聚分韻』を編纂する際、注文を部分的に省略したことがわかる。また、これらのことについては、「元禄九年九月十九日付宗淳・井上玄桐宛澹泊・顧言書簡」[27]に次の記載している。

> **一　一字ヲ二三躰(ニ)書替申候ヲ、「正韻」(ニ)ハ本字之下(ニ)、別(ニ)出申候、此度は本字之下之注(ニ)てみせ申候而、別(ニ)出し不申候様(ニ)仕候、字義各別(ニ)罷成（中略）、字注も随分要ヲつみ申候、簡古ニ仕候、一字にて両韻、又は二三類へ渡り申候字も御座候**（下略）。

『洪武聚分韻』を編纂する時、部類分けは『聚分韻略』を一部修正して用い、字注も極力簡略にすることとしたのである。

つまり、『洪武正韻』が室町時代に日本に将来されことは、義堂周信の日記『空華日用工夫略集』、瑞渓周鳳の『臥雲日件録抜尤』等の

[27] 同「注 24」の 34 頁参照。

記事から明らかである。そして、江戸時代には『洪武正韻彙編』の和刻本が刊行され、更に、水戸藩の光圀の意向によって『洪武正韻』を底本とし、『聚分韻略』(『三重韻』) の体裁にならって再編纂した『洪武聚分韻』が刊行された。

これらの経緯から、『洪武正韻』は日本の辞書史ではあまり取り上げられていないが、中世期に、和漢・漢和聯句の連衆に使用されていたことは明白である。水戸藩で『洪武聚分韻』を編纂した意図は、正統性のある韻書（字書）を守ろうという強い意志の表われであることがわかる。

本稿は 2004 年第 90 回訓点語学会で口頭発表したものを基に修訂して執筆したものである。席上御教示下さった方に感謝申し上げる。

参考文献

1. 玄　幸子（2000）『中国文人の思考と表現』汲古書院。
2. 甯　忌浮（2003）『洪武正韻研究』上海辞書出版社。
3. 川瀬一馬（1986）『増訂古辞書の研究』雄松堂 356 頁。
4. 長澤規矩也（1976）『和刻本漢籍分類目録』汲古書院。
5. 辻善之助（1939）『空華日用工夫略集』太洋社 205 頁。
6. 蔭木英雄（1982）『訓注空華日用工夫略集』思文閣 403 頁。
7. 井上順理（1972）『本邦中世までにおける孟子受容史の研究』風間書房 376 頁。
8. 太田晶二郎（1991）『太田晶二郎著作集』第一冊 275 頁。
9. 倉員正江（1997）『近世文芸』66 巻 33 頁。
10. 清水正健（1934）『増補水戸の文籍』水戸の学風普及会 6 頁。
11. 『洪武正韻』景印文淵閣四庫全書 第 239 冊。

C.E.P.S.